

中世哲学会創立四十周年にあたって

本年6月22日に開かれた常任委員会において、今年は本学会が創立されて丁度40周年にあたるところから、学会創立のために尽力され、その後も学会の発展のために種々御力添え頂いている先生方に、学会として感謝の意を表わしたい、という意向が表明され、それを実行に移すことが決定された。この挨拶は上の意向をうけて致すものである。

中世哲学会の発端については、昭和27年に発行された『会報』第1号に記されているように、昭和25年11月3日、京都大学で日本哲学会が開催された折に、江藤太郎、ヨハネス・ジームス、高田三郎、長澤信壽、松本正夫、山内得立の諸先生が、中世哲学研究者の全国的な連絡組織を設立したいという話し合いをされ、その場で上智大学に設立準備のための事務所を設けることが決定されたのがその第一歩である。この決定にそって発起人をつのることになったが、その趣旨は次のようなものであった。

「……さて中世哲学研究はその特殊な性格上、研究者間に於いて相互の連絡協力を殊に必要と致しますにも拘らず、我国におきましてはその連絡機関なく、研究者は多くの不便を痛感して居ります次第であります。

此の情況にかんがみて、中世思想研究家が各々の思想、傾向、殊にその宗教的立場の如何にかかはらず、全国的な学会を設け、相互の提携をはかり、この不便を除き、互ひに啓発し研究を進め、又海外の関係学会との連絡をも図りたいと存じます。……」

一年後の11月3日、今度は東京大学哲学研究室で第1回設立準備会がもたれ、この時は30人が発起人として名前を連ねている。

中世哲学会の第1回大会は、翌年（昭和27年）5月5日、東京大学山上御

殿で開催された。この大会は実質的には設立総会であり、参加者は29名であったと記録されている。初代委員長には石原謙先生が選ばれ、昭和50年逝去されるまでその職に在られたが、石原先生がほぼ同じ時期に設立された日本基督教学会の理事長をも兼ねられたことは、中世哲学学会にカトリック系の研究者が多く、基督教学会はプロテスタント主導的であった当時の状況にてらして（エクメニズムが大勢とはなっていない当時として）、特筆すべきことと思われる。第2代委員長には松本正夫先生が就任され、ついで第3代山田晶先生と受けつがれた。研究集会がもたれたのは昭和28年5月、早稲田大学で行われた第2回大会が最初であり、仁戸田六三郎先生による「中世哲学の特色——アウグスティヌスの用語に即して」と題する講演の後、江藤太郎先生の司会により松本正夫、J・ジームス、高桑純夫、出隆、滝沢克己、大庭征露、今道友信の諸先生が発言者となってシンポジウムが行われた。なおこのシンポジウムは開催校の配慮により酒杯を傾けながらの文字通りのシンポジウムであった。草創期の学会の雰囲気伝える歴史的事実として紹介しておきたい。

ここで中世哲学学会の前史について詳しくのべることはできないが、明治43年（1910）東京帝国大学文科大学教授ラファエル・フォン・ケーベルによる『神学及中古哲学研究の必要』という62ページの小冊子が発行されたことは特筆に値いする。「（神学と中古哲学の研究は）苟くも身を（西洋の）歴史、哲学、文学若しくは芸術の研究に委ねんと欲する者に必要缺くべからざること」であるというケーベル博士の信念は、弟子の岩下壯一を中世哲学の研究へと赴かせ、その卒業論文は当時の文化大学部長上田萬年博士が将来、中世哲学の講座を担当させようと望んだほどの出来栄えであったが、ヨーロッパ留学中にカトリックの司祭となったため、この期待は満たされなかった。同じくケーベル門下で中世哲学およびキリスト教神学研究の道に進んだのが初代委員長の石原先生である。先生は大学院でアレクサンドリアのクレメンスを専攻されたのであるが、教授会の偏見と無理解のために卒業論文は十年間

ほども放置されたという。

この石原先生の受難の例が示しているように、第二次大戦までは概して中世哲学は偏見と無視に苦しめられるが、戦後、一転して啓蒙期を迎える。この時期について松本正夫先生は「中世哲学会の今昔」（『中世思想研究』23号）において次のように語っておられる。

「戦後五・六年といえは、私達が焦土から立上って、これからは文化によってしか世界に立向えないと心に決め、心中肢股^{しこ}を踏んでいた時代、一人で三人分の仕事ぐらひはしなくてはと気負っていた時代、——実際はそうも行かず、お恥ずかしい次第になったが、——とにかく意気込みだけは盛んであった。それは中世思想研究についての啓蒙期であったとも云えよう。」

まさにこのような先輩方の熱意の結晶として中世哲学会は誕生したのである。ここに現在の中世哲学会の会員全体の名において、学会創立以来、様々の仕方で会の発展のために尽力して下さった先輩諸先生に心から御礼申し上げたい。

次に中世哲学会の現在の状況と将来の課題について一言したい。まだ「中世」といえば「暗黒」と応ずる癖から脱げきれない人も残っているが、中世にも「哲学」はあったのだというアポロギアなしに、純粋な学問的関心から中世哲学の研究に着手する若い人々がふえたことも事実であり、その意味では「啓蒙期」は終わったといえるかもしれない。しかし、かつて中世を「暗黒化」した啓蒙主義の影響は根強いものがあり、中世哲学の研究のために必須の前提であるキリスト教神学の研究がわが国の学界で正式の市民権を得るまでにはなおかなりの年月が必要であろう。

将来の課題としては歴史的研究の水準を欧米の水準までたかめるために努力する必要があると思う。最終的にめざすのは自ら哲学することであっても、学問が共同の事業であり、学界への寄与という責任を回避することができないかぎり、とくに若い研究者にとってはオリジナルな歴史的研究をもって国

際的な中世哲学の研究に参加することが望ましい。そのような歴史的研究もふくめて、優れた研究者を養成するための総合的な中世哲学研究センターが必要な時期が来ているのではなかろうか。欧米の中世研究所におもむいて研究することはもちろん結構であるが、わが国においても十分な研究資料と研究指導体制をかねそなえた、外国からの中世研究者をひきつけうるほどの中世研究センターが誕生してもよい頃ではないか。上智大学の中世思想研究所、京都の聖トマス学院、東京フランシスコ会のボナヴェントゥラ研究所はそれぞれ特色のある活動を行っており、多くの大学で中世哲学研究のための体制が整えられつつあることは確かである。しかし、わが国における中世哲学研究の水準を著しく高めるためには、学界の総力を結集して、これら多くの研究所や研究室の研究・教育活動を支援し、推進しうるようなセンターを創設する必要があるように思う。会員の皆様の御意見を承わりたい。

最後に、この学会の発足以来、学会運営のために蔭の努力を惜しまれなかった歴代の事務局の皆様へ感謝の言葉を申し上げたい。四十年の間に会員数は発足時の十倍以上に増えたが、この間、学会は何度か大きな困難に直面した。それらを克服して学会が発展してきたのは事務局の創意と献身によるところが大である。その御苦勞は知る人ぞ知るとしか言いようがないが、僅かでも知りえた一人として、心から御礼申し上げる。

平成3年11月16日

稲垣 良典